

日本社会心理学会会報

201号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2014年3月19日

日本社会心理学会第55回大会案内

沖縄大会の興奮もさめやらぬうちに、早くも次回大会の開催が近づいてきました。会報では2回にわたり大会に関する案内記事をお届けします。まず今号では、大会準備委員長の亀田達也先生からメッセージを寄せていただきました。

〇〇学兄(姉)さま

拝啓 御地はそろそろ春の気配が漂うころでしょうか。素晴らしかった沖縄大会以来、すっかりご無沙汰しております。まだ厳冬の続いている札幌の地から、フキノトウが芽生える春の訪れを待ちわびつつ、ご挨拶申し上げます。

既にご承知のとおり、**日本社会心理学会第55回大会**を、2014年7月26日(土)、27日(日)の2日間、北海道大学で開催させていただきますことになりました。さきごろお手元にお届けした**第一号通信**でご案内しましたように、山岸俊男先生が委員長をされた第37回大会と同じく、本大会では、“**Back to Basics**”をキーワードに会員間の研究交流を唯一の目標にしております。そのための仕掛けとして、①並行セッション数をワークショップを含め4つに抑える、②ポスターセッションだけの時間帯を両日とも2時間ずつ設ける、③1日目のポスターセッションの時間帯にあわせて「研究懇親会」(アルコール以外は無料です)を行い交流を深める、④2日目の朝8時から1時間、**early bird keynotes**を行う(講演者には下條信輔カリフォルニア工科大学教授、長谷川眞理子総合研究大学院大学教授を予定しています)といったプランを、若く優秀な同僚たちといっしょにいろいろと考えております。

そうそう、もう1つ。大会翌日の28日(月)に、同じく札幌で開催される **International Congress of Neuroethology** (7月29日-8月1日: <http://www.icn2014.jp/>)と共同で、“**Making of Humanities: Biological Roots of Mathematics and Cooperation - A joint workshop of Social Psychology and Neuroethology**”というシンポジウムを企画中です。

Michael Platt, Shinsuke Shimojo, Tetsuro Matsuzawaをはじめ、第一線の優れた研究者が分野の壁を超えて **Humanities** について考え議論する、ワクワクするようなシンポジウムです。大会ホームページに近日中に情報をアップいたしますので、貴学兄

(姉)にも、もう数日、札幌滞在を延ばしてさまざまな知的饗宴をお楽しみいただけるようならば望外の喜びです。

貴学兄(姉)のことですから、相変わらずご多忙のことと思います。お身体大切に、どうぞご自愛下さい。ご研究の進展を祈念しますとともに、さわやかな7月の札幌でお目にかかれますことを心待ちにしております。

追伸 大会委員長をするという事は、私もたぶん「年寄り」というカテゴリに足を踏み入れたのだと理解しています。そうした「老骨」に鞭打ち、“原理主義者”としての「三つ子の魂」

を再確認する意味で、14年前に(まだギリギリ30歳台でした)、社会心理学会会報(広報委員会注:第148号・2000年2月10日刊行)に書かせていただいた若書きの雑文を同封します。大会開催をお引き受けするにあたって、心をよぎった1つの思い(妄執?)として、ご笑覧いただけますと幸いです。

敬具

意見・異見 社会心理学超克論

京都大学の田尾雅夫先生から、意見・異見欄への“投稿”を厳命された。もとより議論は嫌いではない(……好きだ)が、田尾先生の書かれた内容に異見を唱える気持ちは全くない。その意味で「屋上屋を重ねる」ことを畏れるが、“**タオイズム**”の1つのヴァリエーションとして、「社会心理学の基本的な問題」についての私なりの雑感を開示させて頂きたい。

以前、社会心理学会大会に向かう車中で、物理学専攻と思われる大学1年生のグループと乗り合わせたことがある。もちろん彼らと話をしたわけではない。ただぼんやりと話を聞いていただけのことだが、それでも論じられている内容の高度さに心底驚かされた。物理学を学び始めて、たかだか1年の彼らと、10年近く“学者商売”をしている自分との、学問的レベルの違いを実感させられたわけである。もしここに“自然淘汰”がかかるとしたら(それは科学研究費のようなファンディングの形をとるかもしれない)、淘汰は表現された行動・結果に働く以上、確実に自分が淘汰されるだろうと思った。

こうした雑感に対して、ただちに予測される反論は「比較不可能性」の議論である。「社会科学の認識論は自然科学の認識論と異なる」、「人間社会は非線形の複雑系だ」などなど、比較不可能性を正当化する哲学は枚挙にいとまがない。なるほど、それぞれの哲学は十分魅力的かもしれない。しかし、そうした魅力的な言



説が、長い目で見て私たちの学問的な現状を淘汰圧から守ってくれるように思えない。具体的にどのような形をとるにせよ、「自然淘汰」は、言説を超えて、無関心かつ無慈悲に働くだろうと予測するからだ。

さて、気になるのは、こうした恐れが（とりわけ若い世代に）どのくらい共有されているかという点だ。グローバリゼーションの流れは何も経済だけの話ではない。既存の諸領域をはるかに超えた統合への動きは、例えば、メタ理論としての適応論（及びその道具としてのゲーム論）などを軸として、社会科学においても急速に展開しつつある。そうした動きに自ら参入するにせよ、それとは別のメタ理論を探るにせよ、私たちは長期的な見通しと覚悟を必要とする時代に否応なく入りつつあるのではないか。また、そのようなメタ理論的深まりを経てこそ、私たちは、本当の意味

で有効な社会科学的知識を、まさに初めて提供できるのではないか。いずれにせよ、社会心理学の領域固有性を守ろうとする方向は自殺行為のように思えてならない（この意味でアメリカ実験社会心理学会 **SESP** はデッドエンドに見える）。

以上は、研究者としての単純な「心がけ論」だ。単に人々の心がけに期待するという議論は、「社会心理学の現状」といったマクロ問題への社会科学的な対処法としてはいかにも稚拙である。しかし、学者商売が最終的には個人としての知的営為である以上、「心がけ論」は研究を展開する上での有効なヒューリスティック、あるいはリマインダーとして機能するのではないか。これは、「意思」ではなく、「意志」の問題だと思う。

(かめだたつや・北海道大学)

春の方法論セミナー・開催速報

去る3月17日に、上智大学四ツ谷キャンパスにて「春の方法論セミナー：あなたの実験結果、再現できますか？ false-positive psychology の最前線」が開催されました。今年度新たに立ち上がった「新規事業委員会」による企画第1弾です。ここ数年、社会心理学界で発生した複数のスキャンダルがきっかけとなり、再現できない結果の蔓延という問題がクローズアップされ、実験社会心理学の妥当性に疑問が投げかけられるようになってきました。こうした現状を鑑み、この問題にいかに対峙し、研究者としていかに振る舞うべきかを考えるための機会として企画されたセミナーです。STAP細胞「事件」が世の中を騒がせた折も折、たいへん up-to-date なテーマとなりました。

当日は157名（うち非会員57名）の参加者があり、またインターネットライブ中継のユニーク視聴数も304件に達しました。動画も後日公開の予定ですが、ひとまず今号には3名の講師の方々による講演概要を掲載します。



社会心理学における再現可能性問題の概要

竹澤正哲



実証科学としての社会心理学の信頼性を揺るがす問題、すなわち再現可能性問題は、一連のスキャンダルによって幕を開けた。2011年9月、

オランダ南部にあるティルブルク大学は社会心理学教授であった Diederik Stapel を停職処分すると発表した。実験データ捏造の疑いが濃厚となったからである。その後の調査で、そもそも実験が実施されずに無の状態からデータが捏造されたケースが多数発覚し、現在までに54本の論文が撤回される事態に発展した。続く2012年夏、その騒動が冷めやらぬ中、エラスムス大学の Dirk Smeesters、ミシガン大学の Lawrence Sanna による実験データの改ざんが相次いで発覚した。

ひとつのデータポイントが確率的事象に

過ぎないのと同様に、ひとつの実験もまた確率的事象である。故に、ある実験結果が擬陽性である確率はゼロではない。科学はこの問題を追試という一種の集合知によって解決する。すなわち、複数の研究グループが追試に成功すれば現象の確からしさが増す一方、失敗すれば減少する。自然科学にはごく当たり前実装されているこの仕組みが、社会心理学コミュニティでは、不完全にしか機能していないことを示唆する出来事が、捏造スキャンダルとほぼ同時期に発生した。Daryl Bem による ESP 論文の出版、その追試失敗を報告した論文を巡る一連の騒動である（心理学ワールド 2013年4月号掲載の平石界による軽妙洒脱なエッセイが詳しい）。社会心理学における追試研究の軽視という問題が明るみにされたことも、再現可能性問題に対する人々の注目を集めるきっかけとなった。

だがネガティブな結果が出版されにくい現象 - 出版バイアスの存在は昔から知られている。またデータねつ造はスキャンダルだが、多くの善良な社会心理学者にとっ

ては対岸の火事ではない。再現可能性が、実証研究者であるならば誰もが真剣に向き合うべき問題であると認識されるようになるには、*Psychological Science* 誌に掲載された False-positive psychology と題する論文の登場を待たなければならない (Simmons, Nelson, & Simonsohn, 2011)。この論文は善良な社会心理学者が日常的に用いる分析手法、データ収集上の慣行の中に、再現できない結果の源泉が存在していることを白日の下にさらし、大きな衝撃を与えた。

さらなる詳細はセミナーでの発表に譲るが、再現可能性問題は、いくつかの雑誌における執筆ガイドラインの改定を促すなど、我々の研究活動に変化を迫りつつある。なぜ我々はこれまで慣れ親しんできた研究慣行を変えなければならないのか？どこまでの変化が必要とされているのか？そもそも変化は必要なのか？本セミナーがきっかけとなって、会員の間で活発な議論が始まれば幸いである。

(たけざわまさのり・北海道大学)

再現可能性問題に対する諸関係領域の動向

大久保街亜



再現可能性は実証科学にとって根幹に関わる問題である。しかし残念ながら、心理学にも再現可能性に疑義がある研究成果があり、最近はその大きな問題となった。それを受け再現可能性について *Perspectives on Psychological Science* では特集号が組まれたほどである。

再現可能性を低める要因として、擬陽性—真の効果が無いのに誤って効果があると判断すること—の問題が改めて注目されてきた (Simmons, Nelson, & Simonsohn, 2011)。検定結果が有意水準に達しなかった経験は誰にでもあるだろう。そのとき多くの研究者がさほど問題を感じることなくデータを取り足す。だが、ここに落とし穴がある。Simmons et al. (2011) はデータの取り足しにより、擬陽性の確率が飛躍的に増大することを示した。つまり、データを取り足せば (擬陽性のため) 有意な検定結果が得られる可能性が高くなるのである。このように望んだデータが得られるまでデータを取り続けることを *p-hacking* と呼ぶ。*p-hacking* は誤った判断を招き、再現可能性を損なわせる悪しき習慣である。

本講演では、再現可能性について検討するためデータ分析における擬陽性の問題に焦点を当てた。それにあたり、まず擬陽性の判断を、そしてそれを悪用する *p-hacking* を避けるための関連諸領域の対応を概観した。具体的には有意性検定における停止規則とそれに基づいた例数設計の重要性について医学研究、疫学研究、実験心理学研究の例を取り上げた。

さらに論文誌「社会心理学研究」に掲載された論文における *p* 値、標本サイズ、効果量、検定力を調べ、日本の社会心理学における擬陽性の問題への取り組みについて検討した。対応のない *t* 検定を対象を絞り検討したところ、中程度の効果量において *p* 値と効果量に乖離が見られた。すなわち、同一の効果量でも標本サイズの違いにより有意性の判断が異なる場合があることが示された。これは研究計画の段階における例数設計が不適切であることを示唆する。な

お、今回検討対象となった研究について例数設計に関する記述は論文中に全くなかった。さらに、*p* 値と標本サイズには負の相関があり、 $p < .05$ と $p \geq .05$ の検定を比較すると前者で標本サイズが大きくなった。この結果は有意性検定の性質を考えると当然である。しかし、有意差を求めてデータを取り足す *p-hacking* の間接的な証拠ともとらえることが出来るかもしれない。これらの結果は、擬陽性の問題について日本の社会心理学では十分な対応が取られていないことを示唆するだろう。

講演では問題点を指摘するだけでなく、擬陽性の問題への対応策として検定力に基づく例数設計や有意性検定における適応的停止規則を紹介するなど具体的な提案を行った。(おおくぼまちあ・専修大学)

仮説検定における再現性の問題と

新たな方法論

岡田謙介



「 $p < .05$ 」であれば、「有意」と判断すること。これは慣習的に広く採用されている基準である。最近、再現性の観点からこの判断基準を「 $p < .005$ 」に変更する、すなわち有意水準を 1/10 に厳しくすることを提唱する論文が影響力の大きな論文誌に掲載された (Johnson, 2013, *PNAS*)。当該著者の開発した方法で古典的な仮説検定とベイズファクターとを対応づけたとき、後者における慣習的基準と揃えて考えると 5% の有意水準は大きすぎる、というのが主要な根拠である。第一種の誤りの確率が大きすぎる、近年の再現性の問題の一因であると著者は論じている。本講演の第一部では、この論文をめぐる議論を取り上げる。

多くの研究者が経験的にも認識しているとおり、5% という有意水準の値自体に決定的な意味があるわけではない。現代統計学の父とも言われる Fisher が「便利かもしれない」と記した基準が、年月を経てゴールデン・ルールとなってしまったのである。したがって、絶対的基準としての「 $p < .05$ 」を疑うことには意味がある。しかしながら、その代替案としてのベイズファクターにおける基準値にもまた、現実即ち強い根拠があるわけではない。研究者の主張のた

めに帰無仮説を棄却する、という仮説検定の枠組みで考える限り、カットオフ値の選択はつきまとう問題である。そこで、ここから自由になることを第二部では考えてみる。

計算機資源の乏しかった昔は、推測統計学的な議論が可能なのは、整備された数表の利用できるところ一部統計モデルにすぎなかった。しかし時代は変わり、現代では関心のある対象に合わせた豊かな統計モデルを、汎用統計ソフトウェアによってデータに当てはめることができる。このとき、再現性の観点から問題になるのはモデルの予測力である。ベイズ統計学においては、関心のある母数 θ について、データ y を得たもとで

$$p(\theta|y) = \frac{p(y|\theta)p(\theta)}{p(y)}$$

とベイズの定理を用いて事後分布を導出する。同様に将来のデータ (replication data) y_{rep} について考えると、その分布は

$$p(y_{rep}|y) = \int p(y_{rep}|\theta)p(\theta|y)d\theta$$

となる。これを事後予測分布 (posterior predictive distribution) と呼ぶ。事後予測分布は、母数 θ の値を固定するのではなく、そのとりうるすべての値を考慮して積分消去するという意味で、検定の一般化にもなっている。

モデルが適切ならば、手元のデータは事後予測分布と整合的であるはずである。この観点から、事後予測分布の評価を行うことを事後予測チェック (posterior predictive check) と呼び、大別して視覚的な方法と統計量による方法の 2 つがある。前者では事後予測分布から手元のデータと同じ標本サイズのデータを複数回発生させ、その分布や要約統計量をデータと視覚的に比較する。後者ではたとえば、古典的な *p* 値を母数 θ の事後分布で平均化した、事後予測 *p* 値を評価に利用することができる。

パッケージ化された、帰無仮説を棄却するという従来の枠組みにとらわれずデータに当てはめるモデル自体に関心を向けること、そして予測力を高めるべくモデルを改良していくことが、統計モデリングの立場からみた再現性の問題解決への道標と考えられる。(おかだけんすけ・専修大学)

予告・夏の合宿セミナー開催!

新規事業委員会では、先日行われた春の方法論セミナーに続き、8月に「夏の合宿セミナー」を企画しております。日時・会場、概要が決定しましたのでお知らせいたします。主に若手会員を対象に、「夢や元気を与える場」を提供することを目的としています。具体的には、国内外で活躍している研究者と議論を交えることで、新しい研究動向を知るだけでなく、彼らの研究姿勢や考え方に触れることができる機会を会員に提供できればと考えています。

日時：2014年8月29日(金)～30日(土)

会場：八王子セミナーハウス（東京都八王子市下柚木 1987-1）

概要：大きく分けて、2部構成となっています。

第一部：海外から招聘した研究者による講演 2名（村山航氏・榊美知子氏（いずれも [University of Reading, UK](#)））

第二部：小グループに分かれたゼミ形式セミナー

参加者の中から選抜された有志による研究発表を行います。上記2名及び国内で活躍している若手・中堅研究者8名が討論者として各グループに参加します。1つの発表と議論に90分を費やし、研究の意義からメタ理論に至る深いレベルで議論を行います。発表枠は約15の予定です。

また、合宿初日の夜には懇親の場も設けられ、多くの研究者との交流を気軽に楽しむことができます。詳しい情報と募集要項については、4月下旬頃に、学会ウェブサイトに掲載します。

2013年度 若手研究者奨励賞

学会活動担当常任理事・選考委員長 相川 充

1. 選考の経過

今年度の若手研究者奨励賞の告知は、「日本社会心理学会メールニュース」で2度行いました（9/7、10/2）。締め切り日は昨年10月31日。駆け込みぎりぎりセーフという応募も含めて、全部で55件の応募がありました。

選考委員は、規程に従い、理事より2名、一般会員より2名、計4名で構成しました。また、選考委員は、応募者の指導教員ではないことを条件としました。選考委員について、常任理事会で審議・承認していただいたうえで、下記の方々に選考にあたっていただきました。

<選考委員>

[理事] 安藤玲子（金城学院大学）、松浦 均（三重大学）

[一般会員] 菅原健介（聖心女子大学）、吉田寿夫（関西学院大学）

第1次審査では、55名の応募書類の個人情報部分（姓名、所属、指導教員など）を削除した上でPDF化したファイルを、選考委員に送付しました。各選考委員には、お互いに匿名のまま独自に審査を行っていただきました。なお、選考委員長は、応募者の個人情報を知っているので、選考には加わりませんでした。

各選考委員は、評価基準に従って、各応募内容に対してAからCまでの評価を下しました。選考委員長が、その評価結果を得点化し、合計得点によって、応募内容に順位を付けました。

第2次審査でも、応募者名は匿名のまま、ただし、選考委員の名前はお互いに明らかにした上で、応募内容について、選考委員同士のメールで審議をしました。特に、①上位になったものの中に不適切な（倫理的配慮なども含む）ものはないか、②次点になったものの中に上位とすべきものがないか、③同順位になったもの

のはどちらが上位か、などを検討項目としました。

上位5位は、4人の選考委員の審査結果が一致しており、6位との差が明確でした。また、上記①から③についても問題はありませんでした。

そこで、下記の5名を受賞候補者として常任理事会と理事会に報告し、承認を得て、今年の1月14日に、正式な受賞者に決定しました。

「日本社会心理学会メールニュース」で、受賞者を公表し（1/17）、本学会のHPに受賞者一覧と各受賞者が書いた「研究目的」も記載されている旨を伝えました（1/29）。

受賞者には、賞金と賞状を送りました（2/4と2/20）。

<受賞者>（応募書類受付順）

櫻井良祐（東京大学大学院人文社会系研究科、修士課程1年）

「自我枯渇時における自己制御過程：既達成の目標を通じたセルフ・ライセンシング」

山田順子（北海道大学大学院文学研究科、修士課程2年）

「パートナー獲得戦略に及ぼす関係流動性の影響：排他的集中資源投資戦略の適応価をめぐって」

鈴木貴久（総合研究大学院大学、5年一貫制博士課程4年）

「協力関係の拡張を可能にする評判システムの提案」

加村圭史朗（北海道大学大学院文学研究科、修士1年）

「なぜ人は考えると協力しなくなるのか？：目標期待理論からの検討」

須山巨基（北海道大学大学院文学研究科、修士1年）

「累積的文化進化における文化伝播の果たす役割の探索的検討」

2. 講評

4人の選考委員の方々からいただいた講評を以下に要約して列挙しておきます。

- ・ 研究計画の多くは、考え方がしっかりしており、説得力があり、完成度は全般的に高かった。また、斬新さや新奇性、脱常識性を感じさせるものが多かった。若手研究者の意欲と熱意を感じた。
- ・ テーマ的には、社会構造や文化、行動の進化論的機能など、グローバルなテーマを扱いながら、それをコンパクトにシミュレートするような行動経済学的手法が目立っていた。

今後、ますますこの流れは強まってくることを実感した。

- ・ 実験による研究が多く（上位5件はいずれも実験研究）、深い問題意識と、よく検討された実験手続き（条件設定）が高い評価につながった。実験の方が、緻密な変数設定ができ、手堅い感じがするので、審査では有利になるかもしれない。
- ・ 上位5件は、テーマ設定に独創性があること、面白そうな頑健な結果が期待できること、他領域との融合（文化心理学や進化心理学など）が期待されること、社会心理学の発展拡大に貢献しそうなことなど、を感じさせた。

研究会紹介

全国各地で開催されている自主研究会をご紹介するこの連載、今回は「S研」にお願いしました。脈々と続く研究交流の営みをまとめ、ご紹介下さったことに、深く感謝申し上げます。

S研の歩み～あれやこれやの40年～

堀 洋道

S研とは何かご存知でしょうか。S研について会報に書くように依頼され、つい気楽に引き受けてしまいました。いざ書くとなると、あれやこれやと40年の歩みをたどるのはなかなか大変です。たまたまなぜか捨てられず残っていた40冊の手帳（開催日時の記入のみが多い）、散逸して飛び飛びのレジメ（年月日、氏名の記入なしもある）や、何人かの人の記憶や資料をつなぎ合せ、不十分ながらもS研の歩みについてまとめ、S研の紹介に代えたいと思います。

1974年、私が東京工業大学から東京教育大学へ転任したのを機に、社会心理学の勉強、研究交流をしましょうと、柴田博、川上善郎、小熊均、田中祐次、太田敏澄（組織論）さんらに声をかけ数人で研究会を始めました。間もなく斉藤耕二、菊池章夫、竹村研一（故人）さんが加わり、さらに山本真理子（故人）、吉田富二雄、萩原滋、黒澤香、松井豊、根本橋夫、市村操一さんなどが加わり20人近くになりました。発表は自分の興味ある領域での新しいトピックの紹介でも、研究や調査の報告でも、その他何でもあり、ということだったと思います。このころから、通称「S研」と呼ぶようになりました（家族から酒飲み研かと言われたひとがいますが、そうではありません）。

会場は筑波大の茗荷谷校舎[旧教育大跡地]でした。ただし1978年は、研究会の会場確保に難があったので、聖心女子大、法政大、東工大、慶応大などで開催しました。

この時期のメンバーの多くは多少の出入りはありますが、それ以後も中心的な関わり続け、支えてくれています。新たに登場する人たちも増え、その中には、中心的なかわりをする人も出てきます。

1980年以降、最近まで、新たに川名好裕、岡本浩一、山岡重行、茨木正治、岡田努、林理（故人）、菅原健介、西田公昭、古澤照幸、竹村和久、小城英子、上瀬由美子、相川充さん達が出席や発表などで研究会の活性化に貢献しています。

研究会の案内は1998年までは、はがきで通知していたようで

す、この時点で、80人ぐらいだったようです。その後は登録されたメーリング・リストで連絡しています。連絡はS研幹事の筑波大の大学院生が代々担当しています。研究会へ出席しつつ、会場の設営、研究会後の懇親会の世話も協力して進めてくれています。現在のところ、メーリング・リストの登録数は実質約240人ぐらいだそうです。しかし、毎回の研究会への参加者は発表者やテーマによっても多少変わりますが20数名から50名程度です。時には、立ち見が出そうになることもあります。最近では、学会の広報に載せた情報を見て参加したという人もいます。

研究会の開催は、土曜日の3時開始で発表時間1時間半程度、そのあと質疑応答で最大5時30分ぐらいまでに切り上げるようにしています。質問や意見は誰からでも、とくに若い人も遠慮なくすることは大歓迎です。そして何とか終われば、近くの通いなれた赤提灯の懇親会場に直行するということになります（家に直行する人達もかなりいますが）。その日の発表者にお礼の乾杯をして始まり、あとは話したい人と談笑したり、議論に花を咲かせることになります。発表者の方はお礼の気持ちで飲み代は無料ということになっています。

平成の初めごろから、8月にはS研合宿も実施してきました。筑波大大学院のS研幹事グループがマネージしてくれています。研究発表、懇親会、テニス、観光、温泉入浴など盛りだくさんのおもてなしです。

研究発表は多種多様です。理論指向的な研究、社会現象や社会問題の解明を志向する研究、また、様々な研究法上の工夫が見られる研究もあります。ときどきは社会心理学以外の人の発表もあります。若き研究者の発表が多いのですが、大家の先生の話もあります。いずれも、刺激的で、示唆に富み、感動させられます。

S研はその成り立ちから考えると、まず知り合い小集団があり、知り合いの知り合いという形で次々広がってきたということが言えます。誰かから聞いて研究会に参加、研究会の案内を希望する人がメールアドレスを登録するのです。ここまで広がるとお互い知らない関係も増えてきます。所属意識は高い人ばかりではありません。出入り自由なので、興味ある発表の時に参加すればよいのです。出席や発表を機会に相互交流が始まることもあるよう

です。

KSPについては、その存在については知っていましたが、前号の記事を読ませていただき、第一印象はよく似ているかなと思いました。「会員名簿がない、会則がない、会費もない」は同じです。S研の運営に関しては、現在では、全体的には松井豊さんが世話をしてくれています。連絡や準備は大学院のS研幹事が進めてくれるようになっていきます。開催場所を固定し、世話人グループがいるということは相違点でしょうか。

研究会の開催は当初から、月1回をとするが事情によっては延びてもやむを得ないということで進めてきたので、年10回に満たない年もあり、40年で200回ぐらいかと思います。KSPの400回というのは年10回をパーフェクトに40年続けた素晴らしい記

録だと思います。

S研が細々ながら40年続いたのは不思議です。情熱的で、個性的で、才能豊かな人材など、バラエティーに富んだ人々が集まって情報交換したり、刺激し合ったり、ワイワイやるのが大きな要因だと思っています。たまたまそのような場が用意できたということでしょうか。さて、世代交代期とも思われますが、今後どのようになっていくのでしょうか。世話人グループが継承できれば、続いていくと思いますが、時代の要求との兼ね合いで、新しいかたちが出現するかもしれません

最後になりますが、お世話になったのにお名前を出なかった方も大勢いるかと思いますが、お許しください。

(ほりひろみち・筑波大学/大妻女子大学名誉教授)

若手会員、声をあげる

活発に、着実に、あるいはユニークな研究活動をしている若手会員の方々の日々の思いを形にさせていただくこの連載。今回は白岩さんと豊川さんをお願いし、熱筆をふるっていただきました。ちなみに、寄稿も大歓迎です。お待ちしております。

人々の「調査疲れ」とどう向き合うか

白岩祐子

最近、障がいをもつご家族を看護する方、犯罪被害によって家族を失った方に、続けて調査協力をお願いする機会がありました。多くの場合、さまざまな目的に沿って活動している会の幹事会に出向き、研究趣旨などをお伝えして会の協力を求める訳ですが、そこで出会う反応はおおむね次の2つに区別されます。ひとつは「また調査?」という消極的な反応、もうひとつは「調査に協力するのはもうイヤ」という否定的な反応です。はじめから「研究者は出入り禁止」とする会もありました。このことは、調査が特定の人に集中し、過度な負担と「研究への不信」をもたらしていることを意味しており、それ自体見過ごせない問題といえるでしょう。これは、フィールドワークを旨とする研究者にとっても由々しき事態です。今回、少なくとも特定の領域ではなぜこのような「調査疲れ」が起きているのか、どのように対応できるのか、不完全ではありますが、聞き取りした内容に沿って考えてみたいと思います。

調査に対する消極的・否定的な反応には、次の3つの要因があるように思われます。第1に、「これまで何度も調査に協力し、会員が疲弊してきた」という理由です。こちらにとっては初めてのお願ひでも、継続的に活動する全国規模の、あるいはオープンな会では起こりがちです。第2に、「調査が会の活動に貢献しない、会員の関心と

一致しない」場合です。調査目的をつねに会の活動目的にあわせることはできませんし、研究手続きの点からも、そのような対処が必ずしも正しいとはいえません。しかし工夫の余地があるのもこのケースで、例えば会の目的に沿った項目を設問し、その分析も約束することで協力を得られることがあります。「回答しにくさ」を解消するため、会員にあらかじめ設問をみてもらうことも有効です。

第3に、「調査に協力しても何もいいことがない」と認識されている場合です。研究や研究者一般に対する不信感が原因で、もっとも深刻なケースと考えられます。このような反応に対しこちらは、調査のアウトプットについての構想と、それによるインパクトを誠実にお伝えするより他ありません。さらにこれ以前の問題として、「これまで調査結果を知らされたことがない」という話をたびたび耳にしました。(心理学では今や常識ともいうべき)研究倫理がまだ浸透していない他領域では、一部で「調査のやりっぱなし」が行われているようです。これについては、実状を把握し、本当にそうであれば、学問領域を超えた抜本的な対策をとる必要があると個人的に感じます(例えば、大学外で調査する場合、学部・学科を問わず倫理審査を要件化するなど)。前掲した第1の要因も、これによってある程度解消されるかもしれません。もちろん、それによるデメリットも考えられます。頼まれた調査はすべて引き受けて

いるという、ある交通事故被害者の会の代表は、「たとえ卒論レベルの研究でも、学生さんが交通問題に関心を持ってくれるなら、それは大きな意義だと思っています」と話していただきました。調査協力に関する決定権はあくまでもこれらの人々にあるという事実は押さえつつ、協力者に心理的負担を強いることのあるこの種の調査の進め方については、領域横断で議論を深めていく必要があるように思います。

以上のような私の体験はおそらく、その分野でのビッグネーム研究者(先方から調査依頼がある)や、国・地方自治体の研究機関に所属する研究者(調査の背後に施政がみえる)ではなく、大学に所属する若手研究者こそ直面する問題ではないかと考え、いただいたこの貴重な紙面でとりあげました。「すでにこんな議論がありますよ」などのご教示やご意見・アドバイスをいただければ幸いです。

(しらいわゆうこ・東京大学)

比較グループ・ダイナミクスを目指して

豊川 航

1951年夏のミュンヘン市街地を、マルティン・リンダウアーはミツバチの大群を追い、走っていた。ミツバチの群れが新しい巣へ引っ越す過程の一部始終を観察するため



ある。リンダウアーは(幸運にも)負傷のためスターリングラード戦を前に兵役を退くと、動物行動学の祖の1人であるカール・フォン・フリッシュに弟子入りしていた。以来リンダウアーはミツバチのグループ・ダイナミクスに魅せられ、どうしてもそれを、自らの手で解明したいと願っていたのだ。結局その年、彼は合計3回のミツバチ追跡に成功し、仮説を支持する結果を得た。群れを追ってたどり着いた地点はどれも、飛び立つ前に多数の働きバチが尻振りダンスによって指し示した場所と一致していた。つまりミツバチは、巣の場所を示すダンスを介し群れ全体に「合意」を作り出せるような、何らかの機構を持つ可能性が高いということだ。リンダウアーはそのとき人類で初めて、ミツバチの引っ越しが合意形成過程であると認識したのである。

彼のこの仕事をもたらした科学的な価値の1つは、ミツバチという身近な、しかし謎の多い生物の特徴が解明されること自体に由来する自然史的な喜びだろう。しかし、彼の観察が科学の営みへ与えた最大の貢献は、集団の意思決定という現象が地球上において反復して見られることを証

明した点である。1940年代から50年代にかけてというのは、社会心理学者らによる集団意思決定の実証研究が数多く行われた時期である。しかしこの時代に、ヒト以外で民主的意識決定に依存する動物があることをデータによって示した例は他に無かった。このリンダウアーの先駆的な研究が発端となり、今やミツバチにとどまらず、例えばトゲウオやトンケアン・モンキーなど多数の動物種において集団意思決定過程が観察されている。すなわち、集団意思決定というのはヒトだけに見られる例外的な現象ではなく、動物界に繰り返し現れるパターンだったのである。

生態学なのか社会心理学なのかを問わず、自然科学の研究とは単に事実を記載していくのではなく、自然の中に反復して見られる事象を発見し、説明することである。反復されるための条件を掴んだとき予測が可能となる。すなわち、空間的に異なる地点間において、あるいは将来の任意の時点間において、条件さえ揃っていれば現象が反復されることを予測するモデルを得ることが自然科学の究極目標である。社会心理学はこれまでに、異なる文化圏や異なる社会間で反復される現象を明らかにし

てきた。また、反復されないことを利用した比較(例えば文化間比較や、実験における対照実験など)の方法によって、機構の裏に潜む原理や予測に必要な条件を明らかにしてきた。これは自然科学における標準的な態度である。

しかし科学者は今や、集団意思決定という社会心理学的現象が、異なる地域間や時点間だけでなく、異なる動物種間においても繰り返されるパターンであることを認識している。すなわち、集団意思決定が機能するための、ヒトにも、ミツバチにも、ムネボソアリにも、ミーアキャットにも共通の普遍的条件があることを知っている。その条件の解明はもはや、社会心理学と生態学の両方の関心となっているのである。比較認知科学があるように、比較グループ・ダイナミクスが有益なアプローチではないだろうか。自然科学とは本来、対象とする動物種や現象の種類に依存するものではないはずである。分野という枠から時に自由になり、想像を遊ばせる態度を忘れないようにしたい。

(とよかわわたる・北海道大学)

広報委員会からのお知らせ

広報委員会で行っているインターネット上での情報提供について、現状をまとめてご紹介します。どうぞご活用下さい。

◆Web サイト <https://sites.google.com/site/jssppr/>

- (1) 国際誌・書籍掲載論文情報データベース
日本社会心理学会会員による国際査読誌や書籍に掲載された学術論文(2013年以降に公刊されたもの)を掲載しています。3月15日現在で77件が登録されています。情報お待ちしております。
- (2) イベントカレンダー
メールニュースで配信したものを中心に、関連イベント(学会大会、シンポジウム、研究会等)の情報を一覧できるGoogleカレンダー。これがあれば、スケジュール調整の際に「そういやあの研究会いつだったっけ」といちいちメールを掘り起こす必要がなくなります。ご自身のカレンダーにインポートしていただくことができますので、「そういやあのイベントカレンダーどこにあったっけ」と検索する必要はありません。
- (3) 社会心理学の本棚
2003年以降の『社会心理学研究』に書評が掲載された書籍の書誌情報と当該書評へのリンクをリストしています。

◆Twitter http://www.twitter.com/jssp_pr

学会からの告知、近日開催の研究会や近刊書の案内、社会心理学関連のマスメディア紹介記事などをお知らせするほかに、毎日2回(午前/午後8時台)に自動投稿サービス(いわゆるbot)を活用して、(1)過去10年の『社会心理学研究』掲載論文、(2)『社会心理学研究』書評掲載書籍、(3)社会心理学関連の新刊(2013年～)書籍の情報をランダムにツイートしています。緩やかに対外広報を意識した運用のつもりですが、案外「そういやこんな論文や書籍があったんだ」と気づかされることも多いです。よろしければフォローを。

◆メールニュース

いつもお手元にお届けしているメールニュースも、(1)メール配信と同時にソーシャルメディアからも投稿する、(2)内容に応じて記事をカテゴリ化してバックナンバーを検索しやすくする、(3)個別の記事をソーシャルメディアに投稿しやすくする、ためのシステム改修を行っているところです。今後も研究会等の開催案内、人事公募等々には是非ご活用下さい。

会員異動

(2013年12月7日～2014年3月10日)

■新入会員

・一般会員

伊藤尚枝 (恵泉女学園大学人間社会学部社会園芸学科非常勤講師)、金平 希 (福山大学人間文化学部心理学科助教)、野上達也 (明治大学危機管理センター研究推進員)、村上一真 (滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科准教授)、村田明日香 (北海道大学社会科学実験研究センター)、山口隼ノ介 (青山学芸心理)

・大学院生

井ノ川侑果 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)、國政朱里 (青山学院大学社会情報学研究科)、谷本奈穂 (一橋大学社会学研究科)、中島実穂 (東京大学大学院総合文化研究科)、長谷和久 (同志社大学心理学部心理学研究科)、堀本美都子 (神戸大学大学院国際文化研究科)、楊 帆 (一橋大学大学院社会学研究科)

■退会者

井田美恵子、岡田明穂、宮田加久子 (物故)

■所属変更

片桐恵子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授)、松田信樹 (兵庫大学生涯福祉学部)、大藪博記 (鹿児島大学法文学部人文学科准教授)、佐藤剛介 (名古屋大学学生相談総合センター)、岡元陽一 (国際基督教大学大学院アーツサイエンス研究科)、清水 充 (南イリノイ大学エドワーズビル助教)、中分

遥 (北海道大学文学研究科)、高原龍二 (大阪経済大学経営学部講師)

『社会心理学研究』掲載予定論文

■第29巻第3号(2014年3月刊行予定)

《原著》

田村美恵「競争的・非競争的な集団間関係と自己もしくは内集団他者の手がかかり情報が合意性推定に及ぼす影響」
八ッ塚一郎「新聞記事言説による「いじめ」の社会的な構成と解離：助詞分析による検討」

塩谷芳也「東日本大震災における軽度被災者のメンタルヘルスに対するソーシャル・サポートの負の効果」

《資料》

川上直秋・菊地 正・吉田富二雄「字のクセを好きになるか? : 筆跡に基づく単純接触効果の般化」

中原 純「シルバー人材センターにおける活動が生活満足度に与える影響—活動理論 (activity theory of aging) の検証—」

■第30巻第1号(2014年8月刊行予定)

《原著》

野口聡一・木下富雄「宇宙空間における重力基準系の変化は人にどのような影響を与えるか—身体定位、認知、対人関係の変化を中心に」

宮田加久子・安野智子・市川芳治「政治過程におけるオンラインニュースの効果：政治的知識に及ぼす直接的・間接的效果」

工藤大介・中谷内一也「東日本大震災に伴う風評被害：買い控えを引き起こ

す消費者要因の検討」

綿村英一郎・分部利紘・佐伯 昌彦「量刑分布グラフによるアンカリング効果についての実験的検証」

編集後記

社心学会の広報活動に携わり始めて5年が過ぎようとしています。基本的にはエンジョイしていますが(好き勝手にいろいろやっているだろう、とおっしゃる声も甘受します)、時々こんな活動には大して意味がないのではないかなと思うこともあります。特に会報は、「この方にこそ」と思い定めた方々に執筆をお願いし、実際にとても面白い記事を頂戴しているのに、会員の皆様からのリアクションが薄いような…。資料的価値は高いはず、と理解してはいますが、執筆者の皆様、中でも「声をあげた」若手の方々には、是非ご本人にご感想・コメントをお寄せいただければ幸いです。(asarin)

メールニュース広告募集

日本社会心理学会メールニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円
(後日事務局より請求書をお送りします。)

◆オンラインで学会入会申込ができるようになりました◆

2014年2月から、オンライン入会申込サイト(<http://www.socialpsychology.jp/joinus/admission.html>)がオープンしました。

第55回大会で発表を予定されている新入会希望の方は、極力3月末までに申込を完了させて下さい。

特に、大学院生の入会(2014年度進学予定者も、2013年度中に申込が可能です)につきましては、

先生方より学生へのアナウンスをよろしくお願いいたします。